『言語情報学研究報告』No.10（2006）

上級日本語学習者の作文における語彙の誤用

鈴木　綾乃
（東京外国語大学大学院博士前期課程）

1. はじめに

本研究は上級日本語学習者の作文にはどのような語彙の誤用が見られるのかを分類•分析したものである。作文データは，海野多枝監修（2005）『上級学習者の日本語作文データベース（内部資料版）』を用いた。[1]上級学習者は，日常生活では何の問題もなく日本語を運用でき，また複雑で抽象的なことも表現できるレベルであると言える。しかし彼らの日本語は，表現したいことはほぼ伝わり，間違いとも言えないが，不自然であると判断されることがある。特に語彙の誤用は，漢字熟語が正しく使われていない，微妙に意味の異なる語の使い分けができていない，など「間違いではないが不自然な日本語」の要因となっていると考えられるものが多い。このことから，今回の分析では明らかに誤用であると判断できるもののほか，日本語として不適切・不自然なものも誤用として扱い，自然な日本語表現を妨げている語彙の誤用にはどのようなものがあり，どのような傾向が見られるのかを明らかにする。

2. 先行研究

2.1　主要概念の定義

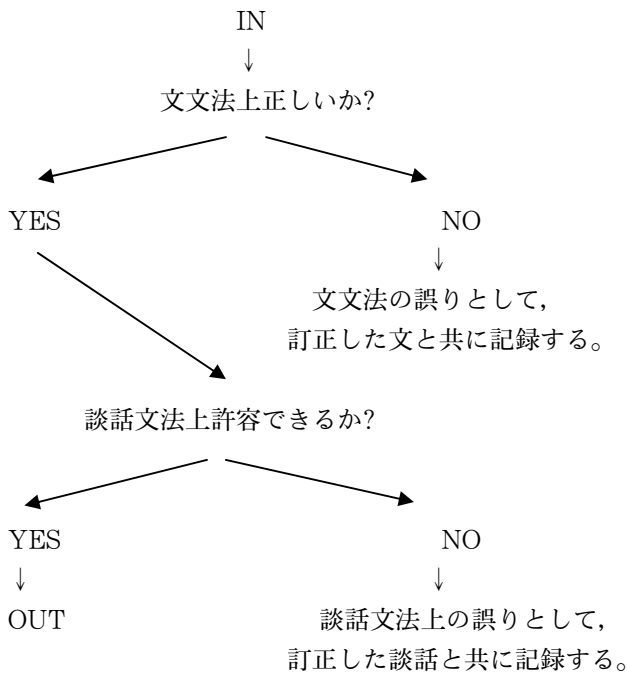
Ellis（1994）は誤用の定義を“deviation from the norms of the target language”「目標言語の規範から逸脱したもの」としたうえで，4 つの問題点をあげた。すなわち，①目標言語の規範が多様であること，②知識•能力の不足による誤用（errors）と，知識•能力を正しく運用できないことによる誤用（mistakes）の区別がはっきりしないこと，③形の上ではっきりと誤りだと分かる明白な誤用（overt errors）と見かけは正しいがその形が学習者の意図と異なった意味を表す隠れた誤用（covert errors）があること，④分析に当たっては正確さと適切さという視点があること，である。

まず１つ目の問題点である「目標言語の規範」に関して，吉川（1982）は誤用を「我々日本人が一読して，あるいは聞いて，“奇妙だな”と感じたもの」だとしている。また，宮崎・新屋（1985）では，「ネイティブスピーカーとの間で無理なくコミュニケーションが成立するかどうかを正誤の主な基準」とした。しかしこのような母語話者の直感だけに頼った判断は，人によって大きく異なってしまうことが考えられ，「目標言語の規範」として十

[1] なおこのデータは「21 世紀 COE プログラム言語運用を基盤とする言語情報学拠点」の一環として 2005 年に出版された『上級日本語学習者の作文データベース』の元となったデータである。詳細については 3.1 を参照にされたい。

分であるとは言いがたい。

これに対して長友•迫田（1987）では，母語話者としての直感に加えて「文文法」と「談話文法」という基準を設けた。これによれば，「文文法」とは「文という単位における文法規則の体系」であり，「談話文法」とは「文という単位を超えた談話というコンテキストにおける言語学規則の体系」である。このように母語話者としての直感のほかに誤用と正用を判断する基準を明確にした上で，次のような誤用認知過程を設定している。



（長友•迫田 1987:145）

「文文法」「談話文法」という基準を明確にすることで，「目標言語の規範」がはっきりし，また同時に，3 つ目の問題点である「明白な誤用」と「隠れた誤用」の扱いについても解決できると考えられる。

しかし，このような誤用認知過程を用いても，問題点②と問題点④は残る。問題点②について，Corder（1967）では知識•能力を正しく運用できないことによる誤用（mistakes）を分析からのぞくべきであると述べられている。しかしこれを Ellis は，学習者の能力が固定的・不変的であると考えたものであり，実際に 2 つを明確にわけることはできないとしている。ひとつの解決策としては，同じ作文の中で何度も同じ誤用が見られる場合は知識•能力の不足による誤用（errors）とし，誤用は一度だけで，正用がほとんどである場合を知識•能力を正しく運用できないことによる誤用（mistakes）とする，という方法が考えられる。しかし Ellis の指摘の通り，2 つを明確に区別することが困難である以上，このような方法にも限界があると考えられる。

問題点④の正確さと適切さという 2 つの視点のうち，どちらを分析に用いるかは，研究

の目的と，分析の対象となる学習者のレベルによって決めることができる。稲垣（1976）では，分析の対象が学習を始めてから 4 ヶ月目の学習者と，1 年 5 ヶ月以上の学習者であり，その目的は「「日本語として正しい表現が出来るかどうか」を知ること」であるので，「日本語として明らかにおかしいもの」のみを誤用としている。一方上級のロシア人学習者を分析対象とした遠藤（1978）は，「文法的には正しくても，日本語としてふさわしくない表現，直訳的な言い回し」も誤用として扱った。また，中川（1993）では，「文法や言葉遣いを「正しい／誤り」という基準でのみ見る視点を問題とし，白黒がはっきりいていると見える正用，誤用だけでなく，どちらとも附かない表現まで扱うことが必要である」としている。本研究では，分析の対象が上級学習者であり，不自然な日本語となってしまう原因としての語彙の誤用にはどのようなものがあるかを探ることが目的であるので，今回の分析でははっきりと誤用だと判断できないものまで扱うことが必要であると考える。

以上のことから，本稿では誤用の定義を「目標言語の規範から逸脱したもの」とし，その「目標言語の規範」とは，長友・迫田（1987）に倣い母語話者としての直感と文文法・談話文法というふたつを用いる。誤用を認知するにあたっては長友・迫田（1987）の誤用認知過程を用いるが，文文法・談話文法の規範から明らかに逸脱しているものはもちろんのこと，はっきりと逸脱していると言えないが日本語として不自然，不適切なものまで分析の対象とする。

最後に，「語彙の誤用」の定義であるが，稲垣（1976）では文法の誤用と語彙の誤用とでは区別しにくい場合があるとし，語彙の誤用とは「その単語を他の単語に置き換えれば正しくなる，というもの」であるとした。本稿ではこの稲垣の定義に従うが，「他の単語に置き換える」だけでなく，「その単語を省くことによって正しくなる」ものも，語彙の誤用として扱う。また，「単語」とは内容語に限ることとする。個々の漢字の字形の誤りやひらがな・カタカナの誤りは，先行研究においても「語彙の誤用」ではなく「表記の誤用」として扱われているので，本稿でもそれに倣い，今回の分析では扱わない。

2.2　誤用の分類に関する先行研究

前述の稲垣（1976）では，様々な母語の学習者の作文の誤用を分析している。この研究でもっとも特徴的なのは，日本語を学び始めて 4 ヶ月目の学習者と，1 年 5 ヶ月以上の学習者の誤用を比較し，「書く」ことによる表現力がどのような進歩を見せるかを分析したことである。誤用を表記，文体，語彙，文法の 4 つに大きく分け，そのうち語彙の誤用は，(1) 連用修飾語，(2) 連体修飾語，(3) 接続詞，(4) 動詞，(5) 自分で作った言い方，(6) その他の 6 つに分類している。全体として誤用の中には基本的なものも含まれていることから，「複雑なこと，使い分けが難しいことは確かにいつまでも間違いやすい」としながらも，「基本的なことが学習の進んだ段階で誤用としてあらわれることもあることを教師は知った上で，それぞれの段階に応じた指導を行わなければならない」，とした。

稲垣（1976）が様々な母語の学習者を分析したのに対して，細川（1990）と佐藤・盧（1993）は特定の母語に限って誤用の分類・分析を行った。

細川（1990）はフランス語母語話者 33 名の日本語作文に見られる誤用の分類を行った。

学習者は既に250時間以上の日本語・日本文化に関する講義を受講していて，作文は宿題として出されたものである。この研究では，寺村（1981）で示された文レベルの誤用の7種のきまり（①語の選択と配列順序，②動詞と格助詞の選択，③名詞の種類と助詞の選択，④述語の活用形と補助形式の選択，⑤修飾のカタチづくり，⑥接続のカタチづくり，⑦談話の中のカタチの適切さ）を参考にまず誤用の分類を行い，その中で必要に応じて追加項目を作成，分類項目を決定するという方法をとっている。分類項目は大きく分けて「1　語レベルの誤用」「2　文レベルの誤用」「3　談話レベルの誤用」の3つであり，それぞれがさらに細かく分けられている。このうち，語彙の誤用に特に関係があるのは「1　語レベルの誤用」の中の，「1－3語の選択に関する誤用」である。1－3は名詞，動詞，形容詞・形容動詞，副詞の品詞に細分類され，さらにそれぞれが「形の適切でないもの」と「意味・用法に関する誤用」に分けられている。このように，分類を細かく徹底して行ったという面では評価できるが，まず何を誤用として扱うのか，その定義や基準が明らかになっていないことや，誤用を文レベルでのみとらえていることなどの問題点がある。

一方，佐藤・盧（1993）は中国人母語話者の作文に見られる誤用を分析した。この研究では吉川（1982）で示された誤用の種類（①発音の誤り，②表記の誤り，③語彙の誤り，④文法の誤り，⑤表現の誤り）のうち，発音の誤りを除いて誤用を分類した。このうち，語彙の誤りは①中国語の使用，②語の製造があげられている。「①中国語の使用」とは，「（日本語と中国語で）表記が同一で意味が類似していても，意味にずれがある場合には誤用が生ずる」とし，助詞や活用語尾の省略や，中国語をそのまま使用したり翻訳したりする場合などが見られることを指摘した。後者は中国語と日本語とで名詞と共に使われる動詞が異なるために誤用が生じる，としており，これは稲垣（1976）でも，「(4) 動詞」の中で「目的語に対して不適当な動詞を使った例」として誤用例があげられている。また「②語の製造」とは，「中国語でも日本語でもない中間の語を自分で造って使う例」であり，こういった誤用はかなり見られるとしている。語の作り方は日本語の類推によるものと，中国語と日本語をあわせて考え出したと思われるものがあり，日本語と中国語を対比させて語彙を教える必要性を述べている。

以上は，特定の項目に限らず学習者の作文にはどのような誤用が見られるのかを分類・分析した研究であるが，一方で語彙の誤用を扱った研究としては，鈴木(1999)と鈴木(2002)があげられる。

鈴木（1999）では，初級から上級の学習者の作文データをもとに，意味的な誤用の傾向を分類している。そこで明らかにされた意味的な誤用の傾向は，以下の通りである。

（1）慣用的に定着した表現にかかわる誤り
　　（a）コロケーション（連語）の誤り
　　（b）漢字熟語に関する誤り
　　（c）その他慣用的な言い回しに関する誤り
（2）類似の表現にかかわる誤り
　　（a）意味の類似
　　（b）意味と音の類似

「(1) 慣習的に定着した表現に関わる誤り」とは,「ある言語社会においてその大多数の成員により慣習的に使用され，固定化・定着化の進んだ表現」を適切に使用しないという誤りで，このことによって不自然な日本語表現が生まれる。特に漢字熟語に関しては，適切に使用しないことによって誤りが多く見られることから，書きことばにおける漢字熟語語彙の重要性を指摘している。また「(2) 類似の表現に関わる誤り」とは,「使用すべき適切な表現を，その表現と何らかの点において類似したほかの表現と混同したことによって生じている」誤りのことで,「(a) 意味の類似」は，意味特徴の異なる部分に関しての不十分な知識が誤用を生むとしている。

これをもとに鈴木 (2002) では，さらに別の中級の学習者の作文を分析し，鈴木 (1999) と同じような傾向が見られることが明らかにされている。ここで示された語彙・意味的な誤用の主な傾向は以下の通りである。

(1) コロケーション（連語）の誤り
(2) その他の慣用的な言い回しに関する誤り
(3) 漢字熟語に関する誤り
(4) 類義表現との混同による誤り

この研究では上記のような傾向を明らかにした上で，文法的に正しくまた学習者の表現意図が推測可能なものであっても，上記のような誤用があることにより日本語として不自然さを感じさせる表現があれば，初級の段階から指導していくべきである，と結論付けている。コロケーションの誤りのように，いわゆる文法的な誤りはなくとも，長期的な視点を持ってこれらの語彙・意味に関わる項目を指導していく必要性を指摘したのである。

以上の研究をふまえて，上級日本語学習者の語彙の誤用の分析を行う。

3. 研究方法

3.1 分析の対象とする作文データ

今回分析の対象とした作文データは海野多枝監修 (2005)『上級学習者の日本語作文データベース (内部資料版)』からとった。このデータベースの中には 5 つの作文テーマで書かれた作文があるが，その 5 つの中から,「友人紹介」「自己紹介」「選択トピック（事前に与えられたいくつかのトピックの中から，学習者自身が選択する)」の 3 つを用いる。この 3 つはすべて授業時に書かれ，原文は手書きである。一方今回分析の対象としない作文テーマ「広告の効果（広告を自由に選択し，描写した上で，その効果について執筆)」と「言語とアイデンティティー（論文「言語とアイデンティティー」を読んだ上で，それについて執筆)」は，宿題として与えられ，手書きとワープロ書きが混ざっている。その場で書いたものと宿題として時間を与えて提出したものについて，佐藤・盧 (1993) は「授業中にその場で作文させるのと，ある程度の時間的余裕を与えて作文を提出させるのとでは，作文にかなり違いが見られる」としている。これは，宿題として与えてあとで提出させる形をとると，学習者が何かの文を書き写してきたり，提出前に母語話者などに添削してもらったりすることがあるからである。また，ワープロ書きであると，漢字の間違いなどワープロの変換ミスなのか，学習者自身の誤用なのかの判別が難しい。以上を考慮し，今回は先

にあげた 3 つを分析の対象とした。作文数は「友人紹介」が 72,「自己紹介」が 133,「選択トピック」が 125 である。

なお，作文執筆者は東京外国語大学外国語学部日本課程所属の外国人留学生 137 名で，全員日本語能力試験 1 級に合格している。母語は様々であるが，中国語・韓国語を母語とする学習者が多い。

3.2　分析方法

分析にあたって, 2.2 であげた先行研究のうち特に稲垣(1976), 細川(1990), 鈴木(1999), 鈴木（2002）を参考にし，まず初めに以下のような分類項目を設定した。

1. コロケーションの誤り
2. 造語／母語もしくはその他の学習言語の使用・翻訳
3. 不適切な漢字熟語の使用
4. 類義表現との混同による誤り
5. 文体の誤り
6. 形の適切でないもの
7. その他意味・用法の適切でないもの

このような分類項目に従って誤用の分類を行ってみたところ,「6. 文体の誤り」は数量的にもあまり多く見られず,「7. その他意味・用法の適切でないもの」に含めて問題ないと判断した。また「2. 造語／母語もしくはその他の学習言語の使用・翻訳」について，分類を行っていく中で 3 つのタイプが観察されたため，細分類項目を設定した。以下にその修正した分類項目を記す。

1. コロケーションの誤り
2. 造語
   2.1 漢字熟語を並べて使用
   2.2 過剰般化
   2.3 母語またはその他の学習言語の使用（母語を使った造語も含む）
3. 不適切な漢字熟語の使用
4. 類義表現との混同による誤り
5. 形の不適切なもの
6. その他意味・用法の適切でないもの

しかしこの分類項目に従い分類を進めた結果，さらにいくつかの問題点が発見された。

まず,「3. 不適切な漢字熟語の使用」と,「4. 類義表現との混同による誤り」について, 3 は似たような意味の漢字熟語の使い分けの問題であり, 4 は漢字熟語以外の意味の似た語の使い分けの問題であることが考えられた。そのためこの 2 つの項目を「類似表現に関す

る誤り」としてひとつの項目にまとめることにした。

さらに,「5. 形の不適切なもの」については，鈴木（1999）の指摘にもあるとおり，形の類似によって混同が起きている誤りだと考えられるものが多く，また「形が不適切」という言い方があいまいであると考え,「類似表現に関する誤り」の中に「形・音が類似しているものを使用」という項目を設けることにした。

また，いわゆる「慣用句」を不適切に使用したものがいくつか見られた。これはより豊かな表現をしようとする上で注目すべき項目だと判断し,「慣用句の誤り」という項目を新たに設けた。

このような考察をふまえ，以下のような分類項目を設定した。

1. コロケーションの誤り
2. 造語
   2.1 漢字熟語を並べて使用
   2.2 母語またはその他の学習言語の使用，及びそれを用いた造語
   2.3 過剰般化
3. 類似表現に関する誤り
   3.1 不適切な漢字熟語の使用
   3.2 類義表現の使用
   3.3 形・音が類似しているものを使用
4. 慣用句の誤り
5. その他意味・用法の適切でないもの

しかしさらに，この分類項目にしたがって分類を進めていくと,「5. その他意味・用法の適切でないもの」に分類したもののなかに,「会社の OL」のように意味が重なっている誤用が多くあった。このため，4 に「冗長」という項目を新たに加え,「慣用句の誤り」を 5 に,「その他意味・用法の適切でないもの」を 6 とした。また,「1. コロケーションの誤り」は類義語が関わっていると思われる誤用が多く見られたため,「造語」を 1 に,「類似表現に関する誤り」を 2 に,「コロケーションの誤り」を 3 とした。

1. 造語
   1.1 漢字熟語を並べて使用
   1.2 母語またはその他の学習言語の使用，及びそれを用いた造語
   1.3 過剰般化
2. 類似表現に関する誤り
   2.1 不適切な漢字熟語の使用
   2.2 類義表現の使用
   2.3 形・音が類似しているものを使用
3. コロケーションの誤り

4. 冗長
5. 慣用句の誤り
6. その他意味・用法の適切でないもの

各項目の定義であるが，「1. 造語」とは，日本語にない表現を学習者が自分で作り出した例である。ここには漢字熟語を並べることによって言いたいことを表現しようとしたものと，母語もしくは以前に学習した言語を使用したもの，日本語の規則を適用できる範囲を超えて適用させた過剰般化が含まれる。これに対して「2. 類似表現に関する誤り」とは，日本語にはあるが類似表現を混同し適切な語彙を使えないという例である。ここでは，適切な漢字熟語を正しく使えないもの，似たような意味の語を混同して使っているもの，形・音が類似した語を混同して使っているものを考える。

「3. コロケーションの誤り」に関して，「コロケーション」の定義として Benson et al.（1986）をあげる。これによれば，「コロケーション」とは“recurrent, semi-fixed combinations”「繰り返される，固定された組み合わせ」であり，このコロケーションには「文法的コロケーション」と「語彙的コロケーション」があるという。

「文法的コロケーション」
A grammatical collocation is a phase consisting of a dominant word （noun, adjective, verb） and a preposition or grammatical structure such as an infinitive or clause.
「文法的コロケーションとは，支配的な語（名詞，形容詞，動詞）と，不定詞や節のような前置詞もしくは文法的構造を含む句である」

「語彙的コロケーション」
Lexical collocation, in contrast to grammatical collocations, normally do not contain prepositions, infinitives, or clauses.
「文法的コロケーションに対して，語彙的コロケーションとは，普通前置詞や不定詞，節を含まないものである」

さらにこれを受けて滝沢（1999）は，コロケーションの 2 つの種類について日本語の例をあげた。これによれば，文法的コロケーションとは「・・・と似ている」の「と」格名詞句と「似ている」や，「・・・で生活する」の「で」格名詞句と「生活する」であり，語彙的コロケーションとは「親切な人」の「親切な」と「人」である。「親切な」と「人」は語彙的コロケーションをなすが，たとえば「親切な」と「石」は語彙的コロケーションをなさないということである。本稿では 2 つのうち「語彙的コロケーション」を，「語彙の誤用」の中のコロケーションの定義とする。

「4. 冗長」とはある語の意味を適切にとらえられていないために，意味が重複してしまっている例である。

また「5. 慣用句の誤り」に関して，慣用句の定義を三省堂編修所（1990）『慣用句こと

わざ辞典』では「二つ以上の単語が決まった結びつきをしているもので，それぞれの単語の意味をただつなぎ合わせても理解できない別の意味を表わすもの」としている。本稿における慣用句の定義もこれに倣う。3.1 で語彙の誤用の定義を「その単語を他の単語に置き換えれば正しくなる，というもの」としたが，慣用句の誤りに限っては単語レベルではなく慣用句それ自体をひとつのまとまりととらえ，その慣用句が適切な意味で使われていないものや，形が不適切であるものを，「慣用句の誤り」とする。

「6. その他意味・用法の適切でないもの」とは，1〜5 のいずれにもあてはまらない誤用である。

以上の分類項目に従ってまずは母語話者としての直感を用いて誤用を抽出・分類し，その後長友・迫田（1987）の誤用認知過程に照らして初めに抽出した誤用を検討するという形で誤用の分類を行う。

4. 結果と考察

以下にそれぞれの項目ごとの分類結果を記す。なお，▲記号は原文では個人名となっていることを表わす。また，誤用は全 6 項目で 702 例見られた。

4.1 造語

「造語」は 702 例中 231 例見られた。

4.1.1 漢字熟語を並べて使用

(1) 熟語と熟語の間にあるべき助詞が抜けているもの

(誤)　　(正)

語学先生　→　語学の先生

大学卒業する　→　大学を卒業する

日本留学する　→　日本に留学する

男女結婚する　→　男女が結婚する

(2) その他

(誤)　　(正)

勉強生活　→　勉強ばかりの生活

4 年間の学習生活　→　いろいろなことが学べる 4 年間

苦しい通学生活　→　苦しい思いをして通学している

発展中国家　→　発展中である国

研究仕事　→　仕事として研究すること

勤務欲望　→　働きたいという気持ち

相互有利　→　お互いにとって有益

ここでは，(1) 入れるべき助詞を省略してしまっているという誤用と，(2) 2 つ以上の漢字熟語を並べて新たな複合語を作ってしまう誤用が見られた。これは佐藤・盧（1993）でも同じ誤用例があげられている。佐藤・盧（1993）ではこのような誤用例を「語彙の誤

り」の「中国語の使用」という項目の中であげており，特に（2）の誤用については「どのような語を補ってよいか分からず中国語をそのまま使用したか，日本語にもこのような複合語があると考えたかのどちらか」だとしている。一方今回の分析では，このような誤用は中国語母語話者に限らず，韓国語母語話者・ベトナム語母語話者・モンゴル語母語話者にも見られた。このように，中国語以外の母語話者にも同じような誤用が見られることから，母語の影響以外に誤用の原因があると考えられる。日本語では，2 つもしくはそれ以上の漢字熟語を並べて使うことがよく行われる。特に，助詞の「の」を省略している例はかなり多い。このことによって，漢字熟語を並べて使うという誤用が起こってしまうと予想される。

4.1.2　母語またはその他の学習言語の使用

（1）中国語の影響と考えられるもの

「～的」「～感」は日本語でもよく使われるが，もとは中国語で，韓国語にも輸入されている。そのため，中国語母語話者と韓国語母語話者が「～的」「～感」を多用する傾向が見られた。

「～的」

（誤）　　（正）

自然的な口頭表現　→　自然な口頭表現

笑顔が純朴的で印象的だ　→　笑顔が純粋な感じで印象的だ

やさしいだが鋭いというのがイメージ的　→　やさしいが鋭いというイメージ

「～感」

（誤）　　（正）

新鮮感を感じる　→　新鮮な感じがする

孤独感を感じる　→　孤独を感じる

（2）中国語をそのまま使ったもの

（誤）　　（正）

先進～　→　進んだ／最新の

翻訳　→　翻訳家

介紹（する）　→　紹介（する）

美　→　アメリカ

（3）韓国語をそのまま使ったもの

（誤）　　（正）

P8 年　→　平成 8 年／H8 年

心が「ちン」した　→　心が痛んだ[2]

---

[2] 母語話者によると，「ちンした」とは「つんとした」という意味だそうであるが，日本語で「心がつんとした」

(4) 英語をカタカナにして使ったもの

(誤)　　(正)

カレッジ／カリージ　→　大学

バラエティの大学生活　→　いろいろなことがある大学生活

ここで特徴的なのは，中国語母語話者と韓国語母語話者による，「～的」「～感」の多用である。この 2 つは日本語でもよく使われ，学習者の母語にも同じような使い方があることから，「～的」「～感」を多用してしまうと考えられる。また，母語をそのまま使用した誤用は，今回の分析では中国語母語話者の誤用が最も多かった。言うまでもなく日本語は中国語からたくさんの言葉を取り入れているため，漢語が多く使われており，中国語と同じ漢字で同じ意味を表わす場合もある。しかし漢字が同じでも意味が異なる場合も多いため，母語と日本語とに違いがあることを分かっていないと，誤用となってしまう。また，日本語での単語が分からなかったときに，母語を使ってしまっても漢字であれば意味は通じるであろう，という意識があるということも考えられる。しかし，今回の分析対象が圧倒的に中国語母語話者（この場合，中国語・韓国語母語話者や台湾語・上海語・広東語母語話者も含む）が多かったため，今回の分析だけでは中国語母語話者が母語をそのまま使うことが特に多い，とは言い切れない。英語の単語をカタカナに直して使う誤用は，日本語が多くの外国語，特に英語からたくさんの言葉を取り入れ，それをカタカナにして使うことが多いことが，原因として考えられる。

また，この項目は，「1. 造語」の中で最も数の多い項目であった。これは，学習者が上級レベルであり，より複雑な内容を表現できるようになった一方で，言いたいことを表現する言葉がわからず，母語に頼ってしまった，ということが考えられる。

4.1.3　過剰般化

(1) 接頭語・接尾語

(誤)　　(正)

人間って，典型と非典型がある　→　典型的な人とそうでない人がいる

不理性　→　理性を失っている

無限度　→　限度なく／際限なく／無制限に

御応援ください　→　応援してください

ご仕事　→　お仕事

新友人　→　新しい友人

初印象　→　第一印象

勉強派　→　勉強好き／勉強ばかりしている[3]

という言い方はしないと考え，「心が痛んだ」とした。

[3] たとえばイヌとネコとを比較してイヌのほうが好きな人を「イヌ派」，ネコのほうが好きな人を「ネコ派」というなど。

(2) その他
(誤)　　(正)
一年間半　→　一年半
通い道　→　通学路[4]
間接喫煙　→　受動喫煙

ここでは，接頭語・接尾語の誤りが多く見られた。中でも「不～」「非～」「無～」の誤りが特に多かった。しかし,「不～」「非～」「無～」の使い分けに関する誤用は 1 例のみ（「*不人道的（→非人道的)」）であり，本来この 3 つがつかない語につけてしまっているという誤用であった。3 つの意味の違いよりも，これらがつく語とつかない語の区別が重要である。この他の過剰般化についても，ある接頭語・接尾語やある規則があてはめられる語とあてはめられない語について，誤用例をもとに分析していく必要がある。

4.2　類似表現に関する誤り

「類似表現に関する誤り」は 702 例中 265 例見られた。

4.2.1　不適切な漢字熟語の使用

(1) 類義の漢字熟語の混同
(誤)　　(正)
未来日本語教師になりたい　→　将来日本語教師になりたい
その原因で，日本に来た　→　そういう理由で，日本に来た

(2) 類義の漢字熟語と和語との混同
ここでは，学習者が漢字熟語に「する」もしくは「なる」をつけて動詞を作り出した例を取り上げる。
ⅰ)「漢字熟語＋する」「漢字熟語＋なる」がない場合
(誤)　　(正)
相違する　→　違っている／異なっている
長寿する　→　長生きする

ⅱ) 文脈上不適切な場合
(誤)　　(正)
本来の電子機械専門と日本語を両方運用できる仕事　→　使える
自分の所有の部屋　→　住んでいる

ⅲ) その他

[4] 動詞の連用形＋名詞。例えば「上り坂」「書き言葉」など。

（誤）　　（正）
営業などの商売　→　物を売る仕事
もっともっと頑張っていきたいと思うのが今の私の様子です　→　気持ち

(3) その他
（誤）　　（正）
日本語を本場に行って学ぶ　→　それが話されている国
外国で生活しながら現場の言語や文化を学ぶ　→　現地
高卒　→　高校を卒業する

この項目では，当初は類義の漢字熟語の混同が多く見られるであろうと予想した。もちろんそういった誤用は予想通り多く見られたが,「漢字熟語＋する」と和語動詞との混同による誤用があることがわかった。類義の漢字熟語の使い分けに比べ数はかなり少ないが,「勉強する」「留学する」など「漢字熟語＋する」の形で多く使われる動詞に対してそうでない動詞（「長寿する」「願望する」「飢餓する」など）があること，また文脈によって漢字熟語動詞と和語動詞を使い分ける場合（「勧誘」と「すすめ」,「依頼する」と「頼る」など）があることが明らかになった。漢字熟語に動詞「する」をつけると動詞になるというのはかなり汎用性のある規則であり，多くの語があるが，類義の和語動詞との使い分けに注意する必要があると考えられる。また，(3) その他の「本場」や「現場」はかなり多く見られた。いずれも,「ある言語が話されている地域」すなわち日本のことを意味しているものであった。この 2 つの語の意味について注意する必要があると考えられる。

この項目は「類似表現の誤り」の中で最も多く見られた項目であった。これは，類義の漢字熟語の難しさのほかに，漢字圏の言語を母語とする学習者の場合，母語と日本語とで漢字熟語の意味が異なるということが誤用の原因としてあげられる。今回の分析対象は漢字圏の言語を母語とする学習者が圧倒的に多かったため，このような結果が出たと考えられる。

4.2.2　類義表現に関する誤り

(1) 動詞
ⅰ）動詞と複合動詞
（誤）　　（正）
同じグループの▲さんと話し合って▲さんのことをしるようになりました　→　話して
初めて知っている方をご紹介します　→　初めて知り合った方

ⅱ）音が同じで，意味によって漢字を使い分ける動詞
（誤）　　（正）
保険会社で努める　→　勤める
始めての一人暮し　→　初めての

日本人と文通を初めてから独学で勉強するようになった　→　始めてから

ⅲ）その他の類義表現
（誤）　　（正）
政治に興味があるようになった　→　興味を持つようになった
言語学を習えるようになってうれしい　→　学べる
日本という国をいろんなメディアでわかった　→　知った
右も左も知らない私　→　分からない

(2) 名詞
（誤）　　（正）
（教師になって）たくさんのものを教えたい　→　たくさんのこと
（学校の）建物の周りが全部テラスで囲まれている　→　ベランダ

(3) コソア
ⅰ）ア系→ソ系
（誤）　　（正）
▲さんは去年の 10 月に九州に来て，あそこで半年ぐらい日本語を勉強しました。　→　そこ
自らアピールを高めようと，あのプログラムを受けた。　→　その

ⅱ）ソ系→コ系
（誤）　　（正）
「本当にそのままでいいのか」　→　このまま
命は人間に対して，それ以上珍貴なものはない　→　これ

ⅲ）その他
（誤）　　（正）
「その人もいたなあ」　→　そんな

(4) 接続詞
（誤）　　（正）
その時　→　それには
　日本に来ることも散々迷ったあげく，家族の理解と支持で来日したとおっしゃっていました。その時，かなりの自信と決心が必要だと思います。
あるいは　→　つまり
　お母さんは何か仕事をしません。あるいは，主婦なんです。

(5) その他

(誤)　　(正)

何年間働きました　→　数年間

国際化すべきという議論はよく聞くが，一体，外国人労働者を受けいれるべきか。　→　果たして

ここでは，動詞，名詞，コソア，接続詞の誤用が多く，中でも動詞が最も多く見られた。「習う」と「学ぶ」，「知る」と「分かる」など類義語の混同の他に，「初め」と「始め」，「努める」と「勤める」など，音が同じで意味によって漢字を使い分けなければならないものの混同も多く見られた。これらは，音が同じで意味が全く異なる，というわけではなく，音が同じで，意味も類似しているものである。そのため漢字の使い分けの際に，個々の漢字の意味はもちろんのこと，類義の漢字との違いを明確に意識できていないと，正しく使い分けることができない。漢字指導をする中で，個々の漢字をひとつずつばらばらに学習するのではなく，類義の漢字と同時に学習することが必要である。

4.2.3　形・音の似ているものを使用

(1) 清音と濁音

(誤)　　(正)

でも，またこれからなんですよ。　→　でも，まだこれからなんですよ。

結果はまだ同じだった。　→　結果はまた同じだった。

私は人間本性に充実な性格である。　→　人間の本能に忠実な性格である。

(2) 長音と短音

(誤)　　(正)

テレビの特殊番組　→　テレビの特集番組

(3) その他

(誤)　　(正)

物事が一切に新しくなってくる　→　物事がいっせいに新しくなってくる

変化なし毎日にあきれ　→　変化のない毎日に飽きて

この項目に関しては，「また」と「まだ」のように発音上の問題点が反映されていると考えられるものと，「あまり」と「あまりに」，「たとえ」と「たとえば」，「必ず」と「必ずしも」のように形が類似しているために混同していると考えられるものとが見られた。意味の類似だけでなく，形や音の類似も誤用の原因となりうるという結果は，鈴木（1999）と同じである。

「類似表現に関する誤り」は6つの項目の中で最も多かった誤用であり，このことは類似表現の使い分けの難しさを浮き彫りにした結果だと言える。また，鈴木（1999）の指摘の通り，誤用はいわゆる類義語辞典などで取り上げられない項目も見られた。誤用分析を通して得られたデータをもとに，誤りやすい類似表現のグループ（ペア）を明らかにし，それを学習者に実際指導する際生かしていく必要がある。

4.3　コロケーションの誤り

「コロケーションの誤り」は702例中106例見られた。

4.3.1　動詞と名詞のコロケーション

(1)「する」と「やる」

(誤)　　(正)

アルバイトをやる　→　アルバイトをする

一人暮しをやる　→　一人暮しをする

日本語をする　→　日本語をやる

(2)「する」と「なる」

(誤)　　(正)

夢中する　→　夢中になる

上達になる　→　上達する／上手になる

反比例になる　→　反比例する

(3)「する」とその他の動詞

(誤)　　(正)

再出発を始まる　→　再出発をする

話を交す　→　話をする／言葉を交す

殺人をする　→　殺人を犯す／人を殺す

(4) 仕事に関するコロケーション

(誤)

仕事に勤める　→　仕事をする

教職をする　→　教職に就く

(5) 確率に関するコロケーション

(誤)　　(正)

～率が増える　→　～率が上がる

～率が減る　→　～率が下がる

(6) その他

（誤）　　（正）
試験に参加する　→　試験を受ける／試験を受験する
ストレスを解散する　→　ストレスを解消する
春の香りが感じてくる　→　春の香りが漂ってくる

4.3.2　形容詞と名詞のコロケーション

（誤）　　（正）
能力を深める／増す　→　能力を高める
能力が下手　→　能力が低い
偉い抱負　→　立派な抱負
体力が弱い　→　体力がない
好奇心が多い　→　好奇心が強い
つながりが少ない　→　つながりが薄い

「コロケーションの誤り」は，動詞と名詞のコロケーションと，形容詞と名詞のコロケーションとが見られ，数の上では動詞と名詞のコロケーションのほうが形容詞と名詞のコロケーションより多く見られた。しかし形容詞と名詞のコロケーションは，鈴木（2002）では「*人気が多かった（→高かった）」という 1 例があげられているのに対し，今回の分析によって「*能力を深める（→高める）」や「*偉い抱負（→立派な）」など，さらに多くの誤用が明らかになった。

「コロケーションの誤り」の中には，「～をする」と「～をやる」のコロケーションのように，類義語の使い分けができていないことによるものがある。名詞との結びつきが 2 つの使い分けのポイントであるので，コロケーションの誤りとしたが，意味が似ているということも誤用の原因のひとつであると考えられる。つまり，コロケーションを名詞と動詞，名詞と形容詞という関係だけでなく，動詞や形容詞の類義語のグループ内，もしくはペアとの関係でも考える必要がある。類義語のグループ（ペア）にはある語とコロケーションをなすものとなさないものがあり，その語の導入のときには語の意味だけでなくコロケーションをなすものとなさないものについても，提示していく必要があるだろう。特に，動詞と名詞のコロケーションで多く見られた (1)「する」と「やる」，(2)「する」と「なる」，(3)「する」とその他の動詞については，ある名詞について動詞はなにを使うのかを明確に示す必要がある。また逆に，たとえば (1)「する」と「やる」を例にあげると，「する」とコロケーションをなす名詞と，「やる」とコロケーションをなす名詞と，それぞれグループにし，ある段階でまとめて提示する，という方法も考えられる。

他には「仕事をする」「会社に勤める」など仕事に関するコロケーション，確率に関するコロケーション，能力に関するコロケーションが多く見られた。特に確率に関するコロケーションは，作文テーマのうち「選択トピック」のみの誤用であったが，確率の話題が出てくる作文では必ずと言っていいほど見られた。「確率」とコロケーションをなすのは「上がる」「下がる」であり，一方「増える」「減る」とコロケーションをなす名詞は「数」であ

る。「犯罪率が増えた」のように確率を「増えた」「減った」であらわした学習者は，この「犯罪が増えた」のような数のコロケーションと混同していることが考えられる。

4.4　冗長

（誤）　　（正）

犯罪を犯した犯人　→　犯罪を犯した人[5]

会社の OL　→　OL

最初会ったときの第一印象　→　第一印象

誤用の数としては他と比べるとかなり少ない（702 例中 33 例）。しかし，正用との比較を行っていない現段階で，誤用の数が少ないことと誤りにくいこととを直接結びつけることはできない。冗長の原因として考えられるのは，その語の意味を正しくとらえられていないことがあげられる。たとえば最も多く見られた「*犯罪を犯した犯人」について言えば，「犯人」という語の意味を「犯罪を犯した人」と正しくとらえられていないために，このような誤用が起こったことが予想される。また「*会社の OL」の場合は，「OL」という語を「社員」の意味で使ってしまっていると考えられる。冗長について先行研究では特に大きく取り上げられていないようであるが，このような誤用によって読者に「くどい」という印象を与えてしまう。つまり，自然な日本語表現のためには必要不可欠な項目であると言える。今後は正用の比較を通してさらに分析を進める必要がある。

4.5　慣用句の誤り

（誤）　　（正）

心を鬼にして夢を捨てることにした。　→　涙を飲んで夢を捨てることにした

私の面から火が出そう　→　私の顔から火が出そう

罪は憎んで人を憎まず　→　罪を憎んで人を憎まず

冗長と同じように，慣用句の誤りも数としてはかなり少ない（702 例中 5 例）が，慣用句の使用それ自体が少ないという印象である。今回の分析では，その慣用句の意味を正しくとらえられていないもの（「*心を鬼にして夢を捨てることにした」）と，慣用句の形が正しくないもの（「*罪は憎んで人を憎まず」など）とが見られた。特に後者については，文法的に見ると決して誤りではないが，慣用句には決まった形がありそれをそのまま使わなければならないため，誤用となってしまっている。上級レベルの学習者は複雑で抽象的なことも表現できるようになり，このような慣用句も正しく使えることが求められる。慣用句が正しく使えることによって，文章のレベルを一段上げることができるからである。今後さらに分析が必要である。

---

[5] 「犯罪を犯す」も冗長であると言えるが，新聞やニュースなどで「犯罪を犯す」という言い方が多く見られることや，また何人かの母語話者に聞いたところ「犯罪を犯す」を誤用ではないと判断した人が多かったため，今回は誤用としなかった。

4.6　その他意味・用法の不適切なもの

(1) 文体が不適切

(誤)　　(正)

1997 年こっちに来ました。　→　1997 年こちらに来ました。

兄ちゃんと二人暮らしをした。　→　兄と二人暮らしをした。

(2) その他

(誤)　　(正)

(スポーツを) するよりもみることが得意だそうです　→　好き

営業マンとして社会人になった彼は経済活動を営んでいるうちに　→　営業活動に関わっている

1〜5 の項目のほかには,「こっち」や「兄ちゃん」のような作文にふさわしくない文体を用いてしまったという誤用が見られたが，数としてはかなり少ない。またいずれの項目にも入らない誤用が 702 例中 65 例見られた。これらのものをどのように考えたらよいか，さらに分析を進める必要がある。

5. おわりに

今回の分析では,「造語」「類似表現に関する誤り」「コロケーションの誤り」「冗長」「慣用句の誤り」という 5 つのタイプが見られた。さらに,「造語」と「類似表現の誤り」,「コロケーションの誤り」で誤用全体の 85%を占めた。このことから，この 3 つを上級学習者の語彙の誤用の傾向として見ることができる。特に,「類似表現に関わる誤り」がもっとも多く，また「コロケーションの誤り」の中にも類義語の使い分けが関わっていると考えられる誤用が多く見られたことは，類似表現の難しさを表した結果だといえる。

この理由のひとつとして考えられるのは，上級レベルの学習者になると，複雑で抽象的な内容が表現できるようになることがあげられる。たとえば作文テーマ「自己紹介」は，初級の段階からよく取り上げられるテーマであるが，今回分析した上級学習者の場合は，名前・出身地のほかに，自分はなぜ日本に来たのか，自分はどういう人間であるかなどについて，様々なエピソードを交えながら詳しく述べている。このように一歩踏み込んだ内容について述べようとすると，使うべき語彙のレベルも上がる。すると，類似表現の使い分けの問題や，言いたいことを表現するための適切な語がわからないという問題が起こってくると予想できる。

また「コロケーションの誤り」に関して，コロケーションという視点から誤用を分析した研究はまだまだ少ないのが現状である。しかし，語そのものの意味がわかっていても，コロケーションの知識がなければ適切に表現することはできない。今回の分析でも，コロケーションの誤りによって，意味は通じるが不自然な文となってしまっているものが多く見られた。今後さらに多くの分析を進める必要がある。

さらに今後の課題として，内容の複雑さと誤用との関係に関することがあげられる。作

文から誤用を抽出している段階で，作文が極端に短いものや，他の作文に比べて内容が薄いという印象を持った作文よりも，複雑なことを表現しようとしている作文のほうが，誤用が多いという印象を受けた。今回分析の対象としたのはすべて日本語能力検定試験１級に合格した上級学習者であるが，実際のレベルは当然様々である。誤用が多いからといってその学習者の能力が低いとも言えないし，逆に誤用が少ないからといって能力が高いとも言えない。

このような問題を解決するためには，まず正用との比較を行う必要がある。正用との比較を行っていない段階で，誤用が少ないことと誤りにくいことを結びつけることはできないからである。また今回は３つの作文テーマについて，テーマごとに誤用を見ることができなかったが，やはりテーマによって現れる誤用が異なっていると思われるので，この点についても分析したい。しかしそれでも，内容の複雑さと誤用との関連については問題が残る。第一に，その内容が複雑であるか，単純であるかという判断の基準が非常にあいまいである。第二に，作文が極端に短いものは誤用が少ないという印象を持ったと書いたが，はたして本当に作文の長さと現れる誤用とに関連があるのか，またそれを証明するために作文の長さ（字数）と誤用・正用の数だけを見ればよいのか，問題である。

以上のような問題点をふまえ，今後さらに分析を進め，さらに，分析の結果を教育の場でどのように生かすことができるかについて考えていきたい。

参考文献

Benson, Morton, Evelyn Benson and Robert Ilson. （1986） “The BBI combinatory dictionary of English : a guide to word combinations” Amsterdam : J. Benjamins

R. Ellis （1994） “The Study of Second Language Acquisition.” Oxford : Oxford University Press

市川保子（1993）「中級レベル学習者の誤用とその分析―複文構造習得過程を中心に―」『日本語教育』81

稲垣滋子（1976）「外国人学生の『書く』ことによる表現力―作文の中の誤用例から―」Annual Reports 1　ICU

稲垣滋子（1985）「誤用分析 1～6」『日本語学』4.1-4.6　明治書院

遠藤織枝（1978）「作文における誤用例―モスクワ大学生の場合―」『日本語教育』34

桜井明治（1986）「中国人日本語表現誤用の分析―中国人学生の日本語作文を素材として―」『長崎県立国際経済大学論集』20（2）,1986.12 長崎県立国際経済大学学術研究会

佐藤修子・盧鳳俊（1993）「大連外国語学院日本語学部学生の日本語作文に見られる誤用」『北星学園大学文学部北星論集』30 北星学園大学

三省堂編修所（1990）『慣用句ことわざ辞典　特装版』三省堂

澁谷勝己（1987）「中間言語研究の現状」『日本語教育』64

鈴木智美（1999）「意味的な誤用に見られる主な傾向―慣習的に定着した表現および類似の表現にかかわる誤り―」『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成

8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究（A）(1)）研究成果報告書（研究課題番号 08558020）研究代表者：大曽美恵子（名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授）
鈴木智美（2002）「2000 年度中級作文に見られる語彙・意味にかかわる誤用―初中級レベルにおける語彙・意味教育の充実を目指して―」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』東京外国語大学日本語教育センター
滝沢直宏（1999）「コロケーションに関わる誤用―――日本語学習者の作文コーパスに見られる英語母語話者の誤用例から―――」『日本語学習者の作文コーパス：電子化による共有資源化』平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金（基盤研究（A）(1)）研究成果報告書（研究課題番号 08558020）研究代表者：大曽美恵子（名古屋大学大学院国際言語文化研究科教授）
茅野直子・仁科喜久子（1978）「学生の誤用例分析と教授法への応用」『日本語教育』 34
塚田茜（2002）「日本語学習者の文章表現の問題点」東京外国語大学卒業論文
寺村秀夫（1981）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
中川正弘（1992）「作文の誤りと文体」『広島大学留学生センター紀要』3
中川正弘（1993）「作文と解釈行為」『広島大学留学生センター紀要』4
中川正弘（1994）「作文の添削と文体差」『広島大学留学生センター紀要』7
長友和彦（1990）「誤用分析研究の現状と課題」『広島大学留学生センター紀要』1
長友和彦・迫田久美子（1987）「誤用分析の基礎研究（1)」『教育学研究紀要』33 巻　中国四国教育学会
長友和彦・迫田久美子（1988）「誤用分析の基礎研究（2)」『教育学研究紀要』34 巻　中国四国教育学会
長友和彦・迫田久美子（1989）「誤用分析の基礎研究（3)」『教育学研究紀要』35 巻　中国四国教育学会
細川秀雄（1990）「フランス人の日本語作文における誤用とその種類」『金沢大学教養部論集 人文科学編』27（2）,1990,p119-160 金沢大学教養部
宮崎茂子（1987）「誤用例をヒントに教授法を考える」『日本語教育』34
宮崎茂子•新屋映子（1985-6）「誤用分析（1）－（6)」『日本語学』vol.4　11 月号－vol.5 4 月号　明治書院
吉川武時（1978）「誤用例による研究の意義と方法」『日本語教育』34
吉川武時（1982-3）「外国人の日本語誤用分析 1-6」『日本語誤用分析』明治書院企画編集部編